

小 春 日 和

こ は る び よ り

2016年 第32号

発 行

愛媛県立中央病院

松山市春日町83番地

TEL:089-947-1111

<http://www.eph.pref.ehime.jp/epch/>

愛媛県では平成29年2月までのドクターヘリの運航開始に向けて、準備を進めています。

愛媛県では、重い病気になった場合、初期治療を開始するまでの時間、あるいは治療ができる病院までの搬送時間において地域格差があることは否めません。このような地域医療格差を少しでも解消し、一人でも多くの患者さんを救うためのシステムがドクターヘリ事業（ドクターヘリ）です。

《ドクターヘリの概要》

ドクターヘリとは、「救急専用の医療機器等を装備したヘリコプターに救急医療の専門医（フライトドクター）及び看護師（フライトナース）が同乗し、消防機関等の要請により救急現場に向かい、救急現場から医療機関に搬送する間、患者に救命医療を行うことのできる救急専用ヘリコプター」をいいます。

このドクターヘリの導入により、医師による速やかな救命医療の開始とあわせて、適切な高度専門医療機関への迅速な搬送が可能となり、救命率の向上及び後遺障害の軽減を図ることができます。



Q&A

Q：ドクターヘリが要請されるのはどんなケースですか？

A：脳卒中や心臓発作、大ケガ、大やけど、異常分娩など緊急に治療を受ける必要がある場合に出勤します。
また、地域の医療機関から高度医療施設への長距離搬送にも有効です。

Q：急病や交通事故でドクターヘリに来てもらいたいときは、どうすればいいのでしょうか？

A：一般の方がドクターヘリの出動を依頼することはできません。119番通報を受けた消防機関が患者の状態、現場の状況などを総合的に判断して要請します

Q：ドクターヘリを利用すると費用はいくらくらいかかりますか？

A：ドクターヘリは救急車と同様、搬送自体に係る患者の費用負担はありません。ただし、現場や搬送中に行われた医療行為に対する医療費は、医療保険制度に基づき患者に請求されます

Q：ドクターヘリはどこから出動するのですか？

A：県立中央病院から出動する（屋上ヘリポート待機方式）場合と、松山空港から出動する（発進基地方式）場合があります。県立中央病院と愛媛大学医学部附属病院のスタッフが搭乗します。

Q：ドクターヘリはいつでも出動できるのですか？

A：ドクターヘリは365日出動可能ですが、出動時間は概ね午前8時30分頃～日没前となっており夜間に出動することはできません。また、視界が確保できない悪天候の場合にも出動できないことがあります

Q：ドクターヘリで搬送される医療機関はどこですか？

A：搬送先医療機関はあらかじめ決まっているわけではなく、ドクターヘリに搭乗している医師が、患者の容態や搬送時間等を考慮して決定します。

Q：ドクターヘリが離着陸するときには注意することは何ですか？

A：離着陸の際にはヘリコプターの風圧や騒音が発生しますので、速やかに退避して下さい（原則として消防機関が安全管理を行いますので、指示に従って下さい）。ドクターヘリの安全運航のために、皆様のご理解とご協力をお願いいたします

Q：ドクターヘリが出動にかかる時間はどれくらいですか？

A：出動要請があつてから、約4分で医療スタッフを乗せて離陸します。また、愛媛県内の所要時間は次表を参照してください。

所要時間（目安）

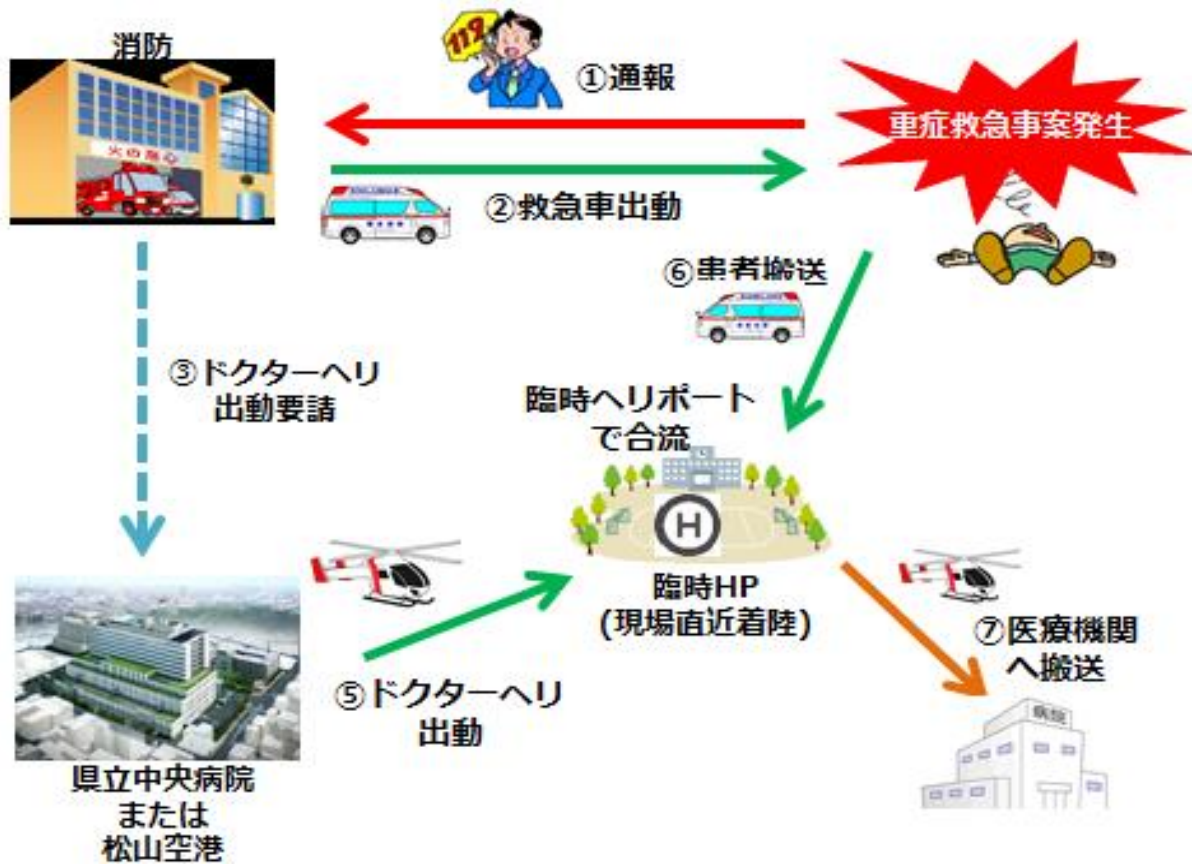


松山市中島	10分以内
久万高原町	10分前後
今治市	10-15分
上島町	20分前後
大洲市	15分前後
八幡浜市	15-20分前後
伊方町	20分前後
四国中央市	20-25分
愛南町	30分前後

《ドクターヘリ運用形態》

ドクターヘリの運用形態は、原則として救急車とのランデブー方式を用いています。この方式では、消防機関からの出動要請によりドクターヘリが出動し、一方、救急車はあらかじめ設定してある救急現場に最も近隣の臨時ヘリポート（公共の運動場、公園、小中学校の校庭など）へ向かいます。飛行中のドクターヘリへ患者の情報とともに臨時ヘリポートの場所を無線で連絡し、臨時ヘリポートでドクターヘリと救急車がドッキングします。

医師は救急車内で患者の診療を開始し、ドクターヘリ内へ患者を収容し離陸します。



健康へのみちしるべ

— 第27回 —

暑い夏の乗り切り方

～第1回救命救急センター市民公開講座から～

第1回 愛媛県立中央病院救命救急センター
市民公開講座
～暑い夏の乗り切り方～

参加無料
申込不要

第一部 <熱中症の基礎知識>
14:00～15:00

司会 愛媛県立中央病院 救命救急センター長 濱見 原
講師 愛媛県立中央病院 救急科医長 橋 峻人

第二部 <今すぐできる夏バテ対策・健康法>
15:00～16:00

講師 愛媛県立中央病院 救急看護認定看護師 矢野 奈美
愛媛県立中央病院 集中ケア認定看護師 山内 京子

日時 平成28年 7月2日(土)
14:00～16:00

会場 愛媛県立中央病院 講堂

主催 愛媛県立中央病院救命救急センター
共催 愛媛県立中央病院 松山消防局
協賛 愛媛県立中央病院 松山消防局
(内線 5592 緊急企画グループまで)

第1回 救命救急センター市民公開講座が7月2日「暑い夏の乗り切り方」というテーマで開催されました。

当日は30度を超える気温の中、約100名の方が参加してくださいました。2部構成で第1部は橘医師より「熱中症の基礎知識」で熱中症とはどのようなものか？気温と体調変化の説明がありました。第2部は「今すぐできる夏バテ対策」で看護師から脱水予防、自律神経の整え方について情報提供しました。簡単に内容をお伝えします。

【気温】気象庁の予報では今年の夏、西日本は7月～9月まで平年より気温が高くなると発表されています。松山市では例年気温が30度以上になる日が60日以上あるためこの2か月は体調管理に努めてください。

【暑さ指数】環境省が暑さ指数 (WBGT (湿球黒球温度) : Wet Bulb Globe Temperature) を発表しています。この指標は、熱中症を予防することを目的として1954年にアメリカで提案された指標です。単位は気温と同じ摂氏度 (°C) で示されますが、その値は気温とは異なります。

暑さ指数 (WBGT) は人体と外気との熱のやりとり (熱収支) に着目した指標で、人体の熱収支に与える影響の大きい ①湿度 ②日射・輻射 (ふくしゃ) など周辺の熱環境 ③気温の3つを取り入れた指標です。

暑さ指数が28度を超えると熱中症の発生率が高くなるといわれています。環境省のホームページや天気予報などで発表していますので情報を確認して予防に活用してください。

暑さ指数は1日の中でも12時～18時が高くなります。昼間の外出を避けて室内でもエアコンを利用してください。

【水分補給】室内でも脱水が起こり熱中症になることがあります。喉が渇かなくても定期的に水分をとって涼しい環境で過ごすようにしてください。朝起きた時、10時、12時、15時、18時、21時、寝る前という風に少しずつ摂取することをお勧めします。

早朝のウォーキングは涼しいですが、起きた時は体に水分が不足していますので水分補給をしてから運動を開始してください。大量に汗をかいたときは、塩分も不足します。塩飴や経口補水飲料なども販売されています。食べてみて「おいしい」と感じたら塩分が不足している可能性があります。水分とともに塩分も補給してください。

【自律神経の乱れについて】自律神経の乱れが夏バテにつながります。

- ①体内の水分・ミネラル不足…脱水症状
- ②暑さによる食欲の低下…栄養不足
- ③暑さとエアコンによる冷えの繰り返し…自律神経の乱れという環境（気温）

が原因と言われているのが夏バテです。

水分やミネラルの不足から集中力の欠如や、筋肉の引きつりを感じます。食欲低下は1日の水分摂取量を減少させてしまいます。10時・15時におやつを摂取して果物や乳製品から栄養補給してください。

また室外と室内の気温の違いが疲労につながります。公共の施設で気温の調整ができない場合もあると思うので、羽織る衣類や冷却材などをうまく活用して温度調整をしてください。

【熱中症の応急処置】環境省が提示しているポスターを紹介いたします。めまい、立ちくらみ、筋肉のこむら返り（痛い）汗をふいてもふいても出てくる。などの熱中症を疑う症状があれば

- ① 涼しい場所へ移動させる。
- ② 衣服を脱がせ、身体を冷やす。
- ③ 水分・塩分を補給する。（スポーツドリンク、経口補水液など意識がはっきりしていない自力で水を飲めなかったら、すぐに救急車を要請！してください。

救急車が来るまでの間も涼しい場所で体温を下げるようにしてください。

最後に、暑い中講座を聞きに来てくださった皆様、ありがとうございました。少しでも夏をのりきるために役立っていただければ幸いです。まだまだ暑い夏は続きますが体調に注意していただき暑い中でも気持ちよく過ごしていただけたらと思います。ありがとうございました。

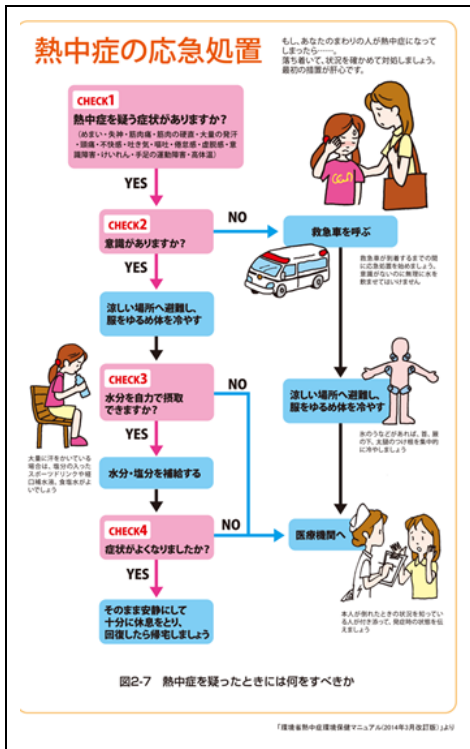


図2-7 熱中症を疑ったときには何をすべきか

「環境省熱中症情報提供マニュアル(2014年3月改訂版)」より

医療安全管理部だより No. 28

医療はチームで行なうってご存知ですか？

このチームというのは、患者さんの病気を治すために、医師、看護師はもちろん薬剤師や臨床検査技師、放射線技師などたくさんの医療スタッフとともに、患者さんも含むチームをいいます。

一番中心となるのは患者さんです。そのためには、患者さん自身のご自身の病気について医師からしっかりと説明を受け、病気の知識を持つておくことや治療の経過を理解しておくことが大切です。

そして内服している薬があれば、その作用やいつ飲まなければならないのかを知



ったうえで正しく服用する必要があります。患者さんと医療スタッフが、手を取り合って病気と闘う、それがチーム医療であり、患者中心の医療なのです。

チーム医療をしっかりとご理解していただいたうえで、チームの一員としてご協力を宜しくお願い致します。

